

山形大学形成外専門研修プログラム

(目 次)

1. 山形大学形成外科研修プログラムについて
2. 形成外科専門研修はどのように行われるのか
3. 専攻医の到達目標（習得すべき知識・技能・態度など）
4. 各種カンファランスなどによる知識・技能の習得
5. 学問的姿勢について
6. 医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性などについて
7. 施設群による専門研修プログラムおよび地域医療についての考え方
8. 専門研修プログラムの施設群と専攻医受け入れ人数について
9. 施設群における専門研修コースについて
10. 専門研修の評価について
11. 専門研修管理委員会について
12. 専攻医の処遇および就業環境について
13. 専門研修プログラムの改善方法
14. 修了判定について
15. 専攻医が専門研修プログラムの修了に向けて行うべきこと
16. Subspecialty 領域との連続性について
17. 形成外科研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム研修の条件
18. 専門研修プログラム管理委員会
19. 専門研修指導医
20. 専門研修実績記録システム、マニュアル等について
21. 研修に対するサイトビジット（訪問調査）について
22. 専攻医の採用と修了

1. 山形大学形成外科研修プログラムについて

1) プログラムの目的

臨床系医学の一分野であり、基本領域の診療科である形成外科は、先天性あるいは後天性に生じた変形や機能障害に対して外科的手技を駆使することにより、形態および機能を回復させ患者の Quality of Life の向上に貢献することを掲げた外科系専門分野です。

形成外科専門医制度は、形成外科専門医として有すべき診断能力の水準と認定のプロセスを明示するものであり、専門研修プログラムは医師として必要な基本的診断能力（コアコンピテンシー）と形成外科領域の専門的能力，社会性，倫理性を備えた形成外科専門医を育成することを目的としています。

2) 形成外科専門医の使命

形成外科専門医は、形成外科領域における幅広い知識と練磨した技術を習得することはもちろん、同時に医学発展のための研究マインドを持ち、社会性と高い倫理性を備えた医師となり、標準的医療を安全に提供し国民の健康と福祉に貢献できるよう自己研鑽する使命があります。

上記目的と使命が達成できるように、専門研修プログラムでは基幹施設と連携施設の病院群で指導医のもとに研修が行なわれます。専門研修プログラムでは外傷、先天異常、腫瘍、瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド、難治性潰瘍、炎症・変性疾患、美容外科などについて研修することができます。

研修の一部には臨床系大学院を組み入れることもできます。また、Subspecialty 領域専門医の研修準備をすることもできるよう配慮しています。更に、専門研修プログラムでは医師としての幅が広げられるよう、臨床現場から見つけ出した題材の研究手法，論理的な考察，統計学的な評価，論文にまとめ発表する能力の育成を行います。専門研修プログラム終了後には専門知識と診療技術を習得し、他の診療科とのチーム医療を実践できる能力を備えるとともに社会性と高い倫理性を持った形成外科専門医となります。

2. 形成外科専門研修はどのように行われるか

1) 研修段階の定義

形成外科専門医は、初期臨床研修の 2 年間と専門研修（後期研修）の 4 年間の合計 6 年間の研修で育成されます。

- ・ 初期臨床研修 2 年間に自由選択により形成外科研修を選択することができますが、この期間をもって全体での 6 年間の研修期間を短縮することはできません。
- ・ 専門研修の 4 年間で、医師として倫理的・社会的に基本的な診療能力を身につけると、日本形成外科学会が定める「形成外科領域専門研修カリキュラム」にもとづいて形成外科専門医に求められる専門技能の修得目標を設定します。それぞれの年度の終わりに達成度を評価したのち、専門医として独立し医療を実践できるまでに実力をつけていくように配慮します。具体的な評価方法は後の項目で示します。
- ・ 専門研修期間中に大学院へ進むことは可能です。臨床医学コースを選択して、臨床に従事しながら臨床研究を進めるのであれば、その期間は専門研修として扱われます。

- ・ Subspecialty 領域専門医によっては、形成外科専門研修を修了し専門医資格を修得した年の年度初めに遡って、Subspecialty 領域研修の開始と認める場合があります。
- ・ 専門研修プログラムの終了判定には、経験症例数が必要です。日本形成外科学会専門医制度が定める研修カリキュラムに示されている研修目標および経験すべき症例数を参照してください（次表にも示します）。

形成外科領域専門研修における必要経験症例数一覧

A：指定症例の内訳と総計

NCD形成外科疾患大分類

下位分類

経験症例数（執刀数）

※経験症例数内に執刀数を含む

Ⅰ 外傷	熱傷・凍傷・化学損傷・電撃傷	60 (10)
	顔面軟部組織損傷	
	顔面骨折	
	上肢・下肢の外傷	
Ⅱ 先天異常	唇裂・口蓋裂	15 (4)
	頭蓋・顎・顔面・頸部	
	四肢	
Ⅲ 腫瘍	良性腫瘍・母斑・血管腫	90 (18)
	悪性腫瘍	
	悪性腫瘍切除後の組織欠損	
Ⅳ 瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド		15 (3)
Ⅴ 難治性潰瘍	褥瘡・その他の潰瘍（下腿・足潰瘍を含む）	25 (3)
Ⅵ 炎症・変性疾患	四肢・体幹・その他の炎症・変性疾患	Ⅷと合わせて 15 (2)
Ⅶ 美容	（必要経験症例には含まれない）	0 (0)
Ⅷ その他	眼瞼下垂、腋臭症、その他	Ⅵと合わせて 15 (2)

指定症例の総計

220 (40)

B：自由選択枠の症例数

大分類の全疾患がカウント可能、またⅦ美容は手術、非手術がカウント可能

80 (40)

C：総合必要経験症例数

300 (80)

2) 年次毎の専門研修計画

専攻医の研修は毎年の達成目標と達成度を評価しながら進められます。以下に年次毎の研修内容・修得目標の目安を示します。

【専門研修 1 年目 (SR1)】

一般的な医師としての基本的診療能力、および形成外科の基本的知識と基本的技能の修得を目標とします。具体的には、医療面接・記録を行うこと、診断を確定させるための検査を行うこと、局所麻酔方法、外用療法、病変部の固定方法、理学療法の処方などを正しく行えるようになることを目標とします。縫合法の基本を習得するために、再建手術における皮弁採取部の閉創などを通じてマンツーマンの指導を行っています。さらに、学会・研究会への参加、およびe-learning や学会が作成しているビデオライブラリーなどを通して自発的に専門知識・技能の修得を図ります。形成外科が担当する疾患は種類が多岐にわたり、頻度があまり多くない疾患もあるため、臨床研修だけでなく著書や論文を通読して幅広く学習する必要もあります。

【専門研修 2 年目 (SR2)】

専門研修 1 年目研修事項を確実にこなせることを前提に、形成外科の手術を中心とした基本的技能を身につけていきます。研修期間中に 1) 外傷, 2) 先天異常, 3) 腫瘍, 4) 瘢痕・瘢痕拘縮, 5) 難治性潰瘍, 6) 炎症・変性疾患について基本的な手術手技を習得します。再建に使用する典型的な皮弁の挙上など、特徴的な手技の指導を受けるのもこの時期となります。

【専門研修 3 年目 (SR3)】

マイクロサージャリーをはじめとする高度な技術を要する手術手技を習得します。練習用のマイクロサージャリーで修練を行ったうえで、臨床でのマイクロサージャリー助手、そして術者を経験してもらいます。また、学会発表や論文作成を行うための基本的知識を身につけます。山形大学医学部附属病院では研修期間中に術者として経験すべきとされている種類の手術が多いため、最低1年以上所属するプログラムとしています。再建に使用する典型的な皮弁の挙上など、特徴的な手技の指導を受けるのもこの時期となります。

【専門研修 4 年目 (SR4)】

3 年目までの研修事項をより深く理解し、自分自身が主体となって治療を進めていけるようにします。さらに、再建外科医として他科医師と協力の上、治療する能力を身につけます。また、言語・音声・運動能力などのリハビリテーションを他の医療従事者

と協力の上、指示・実践する能力を習得します。

3) 研修の週間計画および年間計画

基幹施設（山形大学医学部附属病院）の専攻医 1 名の週間予定を例として示します。専攻医には週 半日の学外業務日（兼業）が最大月6回与えられます。連携施設や地域医療研修施設における手術の補助など、学外業務における内容も研修の一部として役に立てるよう配慮しています。

	午前	午後	
月	手術(全麻)	手術(全麻)	
火	外来、病棟処置	手術(他科再建)	他科合同カンファランス
水	外来、病棟処置	手術(局麻)	
木	外来、病棟処置	学生小講義、縫合実習	形成外科カンファランス
金	手術(全麻)	手術(全麻)	

山形大学医学部医学科の 4～6 年の臨床実習のため学生が診療に参加します。専攻医は学生の指導にも必要な役割を果たすことになります。

木曜日夕方には科の定期カンファランス（術後・術前症例検討、各医師が受け持つ相談症例の治療方針検討、学会発表の予行演習など）を行っています。活発な討論が行われ、貴重な教育の場となっています。また、火曜日夕方には、耳鼻科、整形外科など再建手術を行う科との合同カンファランスを行い、お互いの術式や手術手順の確認などを行っています。

この科を超えた直接対面のカンファランスを重要視しています。

■ 専門研修プログラムに関連した全体行事の年間スケジュール ■

- 4 月 SR1：研修開始。専攻医および指導医に提出用資料の配布。
SR2・SR3・SR4：研修終了予定者：前年度の研修目標達成度評価報告用紙と経験症例数報告用紙を提出
指導医・指導責任者：前年度の指導実績報告用紙の提出
日本形成外科学会学術集会および春期学術講習会への参加
- 8 月 研修終了予定者：専門医申請書類請求開始（10 月に締め切り。詳細は要確認）
- 10 月 SR2・SR3・SR4：研修目標達成度評価および経験症例の中間報告
日本形成外科学会基礎学術集会および秋期学術講習会への参加
- 11 月 研修終了予定者：専門医書類選考委員会の開催

- 12月 専門研修プログラム管理委員会の開催
- 1月 研修終了予定者：専門医認定審査（筆記試験、面接試験）
- 3月 それぞれの年度の研修終了

3. 専攻医の到達目標（習得すべき知識・技能・態度など）

基幹施設である山形大学医学部附属病院は、大学病院でありながら地域の中核病院としての役目も担っているため、全ての疾患群について学ぶことができます。中でも、先天異常、悪性腫瘍切除後の即時再建、熱傷の急性期治療および瘢痕・瘢痕拘縮に対する治療、レーザー治療を多く学ぶことができ、連携施設では特に外傷、腫瘍、難治性潰瘍などを多く学ぶことができます。双方で研修することによりそれぞれの特徴を生かした症例や技能を広く学ぶことができます。

1) 基幹施設である山形大学医学部附属病院の特徴

地域における総合的な形成外科の拠点

山形大学医学部附属病院形成外科は、診療科として独立して8年目の新設診療科ですが、県内唯一の大学病院として地域医療の最前線を担っています。一般的な外傷・熱傷の救急患者も多く、若手医師にとっては形成外科の救急医療拠点として、首都圏の大学病院とは違った総合的な形成外科治療を習得できる施設であると考えています。

① 再建手術

癌治療の最前線を大学病院全体で取り組んでいることもあって、耳鼻科、整形外科（悪性軟部腫瘍の専門チームあり）、消化器外科、乳腺外科、婦人科、脳神経外科などと連携した再建手術が多いことも特徴です。皮弁挙上やマイクロサージャリーを日常的に学ぶことができ、助手としての経験を積んだのち、術者として行うことも可能となっています。

② 歯科口腔外科との連携

医学部では、歯科口腔・形成外科学講座として研究、教育活動を行っているため、歯科口腔外科との連携が密です。下顎骨骨折を伴う多発顔面骨骨折や、悪性腫瘍による下顎再建、顎変形症、唇顎口蓋裂など、咬合の専門的な知識と治療技術を要するため、この連携は非常に重要です。当施設では歯科技工士による立体モデル作成や手術シミュレーション研究も積極的に行っており、同じ講座の一員として真近で学ぶことができます。

③ 下肢救済に関する総合的治療

血流の評価と血行再建術はこの分野の重要なファクターですが、この分野を専門とする循環器内科とのチーム医療が確立しています。患者も多く、県内における下肢救済の砦とし

て機能しています。

④ 集中治療部門と連携した広範囲熱傷の治療

社会的にもその対応が求められる広範囲熱傷に関しては、院内の高度集中治療部門と連携した治療を行う体制となっています。熱傷は創傷治癒の知識と技術、デブリードマンと植皮手術、瘢痕予防とリハビリテーション、各種皮弁術と組み合わせた瘢痕拘縮の治療など、形成外科の基本となる要素がつまった分野であり、専攻医にとっては非常に勉強になるものです。熱傷の総合治療、管理を学ぶことは重要であると考えています。なお、日本熱傷学会の専門医研修認定施設の認定も受けています。

⑤ 重度上肢外傷の治療

大学病院内整形外科のほか、地域基幹病院の整形外科と重度上肢外傷の救急医療は協力体制を組んでいます。どこの地域医療機関病院で患者を治療することになっても合同で治療チームを結成できるような診療体制となっています。

2) 具体的な到達目標

① 専門知識

専攻医は専門研修プログラムに沿って 1) 外傷, 2) 先天異常, 3) 腫瘍, 4) 瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド, 5) 難治性潰瘍, 6) 炎症・変性疾患, 7) 美容外科について広く学ぶ必要があります。専攻医が習得すべき年次ごとの内容については資料 1 を参照してください。

② 専門技能

形成外科領域の診療を 1) 医療面接, 2) 診断, 3) 検査, 4) 治療, 5) 偶発症に留意して実践する能力の開発に務める必要があります。それぞれの具体的内容、年次ごとの内容については「形成外科領域専門研修カリキュラム」を参照してください。

③ 経験すべき疾患・病態

「形成外科領域専門研修カリキュラム」を参照

④ 経験すべき診察・検査

「形成外科領域専門研修カリキュラム」を参照

⑤ 経験すべき手術・処置

「形成外科領域専門研修カリキュラム」を参照

⑥ 連携施設での経験

地域医療の経験を必須とします。山形大学形成外科研修プログラムには、基幹施設である山形大学医学部附属病院（山形県山形市、631 床）のほか、日本海総合病院（山形県酒田市、630 床）、公立置賜総合病院（山形県川西町、520 床）、獨協医科大学埼玉医療センター（埼玉県越谷市、928 床）といったその地域の拠点で中核となる施設が連携病院群に入っています。これらの施設は連携施設でありながら、地域医療を実践している病院として地域医療研修施設を兼ねています。

また、基幹施設である獨協医科大学病院（栃木県壬生町、1167 床）とも連携しており、手の先天性形態異常、小耳症、顔面神経麻痺、リンパ浮腫、救命救急センターと連携した外傷治療など、よりバリエーションに富んだ症例を経験することができるシステムとしています。

4. 各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得

- ・ 基幹施設および連携施設それぞれにおいて、医師および看護スタッフによる治療および管理方針の症例検討会を行います。専攻医はその場で積極的に意見を述べ、上級医だけでなく同僚や後輩の意見を聞くことにより、具体的な治療方法や管理方法を自ら考えていくことができるようにします。基幹施設である山形大学医学部附属病院では毎週木曜日夕方に形成外科カンファレンスを行っています。
- ・ 各施設において抄読会や勉強会を実施します。専攻医は教科書や学術論文を参照する習慣をつけることを重視しています。
- ・ 手術手技をトレーニングする設備，教育 DVD，学会が提供するインターネット上のコンテンツなどを用いて積極的に手術手技を学びます。
- ・ 日本形成外科学会の学術集会（特に学術講習会），日本形成外科学会地方会，日本形成外科学会が認める関連学会，日本形成外科学会が提供する e-learning、そして各施設で実施される院内講習会で、標準的医療および今後期待される先進的医療、医療安全、感染対策、教育技能などを学べます。積極的に受講してください。

5. 学問的姿勢について

指導医は専攻医が研修目的を達成できるよう指導しますが、専攻医も自らの診療内容を常にチェックし、研鑽、自己学習し、知識を補足することが求められます。知識として Evidence-Based Medicine（以下 EBM）は当然その基礎となります。専門研修プログラムでは症例に関するカンファレンスが設定されていますが、これに積極的に参加し、呈示と討論ができるようにしてください。専攻医は受け持ち患者についての疑問を提示し、同僚や指導医から提示された疑問については、EBM に沿って批判的吟味を行う姿勢が重要です。

そして、日常の診療から疑問に思ったことを研究課題とし、参考文献を資料として研究方法を組み立て、結果をまとめ、論理的、統計学的な正当性を持って評価、考察する能力を養うことが大切です。専攻医は学会に積極的に参加し、その成果を発表する姿勢を身に付けてください。

専門研修プログラム終了後に形成外科領域専門医資格を受験するためには以下の条件を充足する必要があります。

- 1) 6年以上の日本国医師免許証を有するもの。
- 2) 初期臨床研修2年の後、学会が推薦し機構の認定を受けた専門研修基幹施設あるいは専門研修連携施設において通算4年以上の形成外科研修を終了していること。
ただし、本プログラムでは専門研修基幹施設での最低1年の研修を必要とします。
- 3) 研修期間中に直接関与した300症例（うち80症例以上は術者）および申請者が術者として手術を行った10症例についての所定の病歴要約の提出が必要です。
- 4) 日本形成外科学会主催の講習会受講証明書を4枚以上有すること。
- 5) 少なくとも1編以上の形成外科に関する論文を筆頭著者として発表しているもの。（発表誌は年2回以上定期発行され、査読のあるものに限りです）

なお、専門医資格の更新には診療実績の証明、専門医共通講習、診療領域別講習、学術業績・診療以外の活動実績など5年間に合計50単位の取得が求められます。

6. 医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性などについて

専攻医は、医師として自己管理能力を身につけ、生涯にわたり基本的診療能力（コアコンピテンシー）を涵養する努力が必要です。基本的診療能力には領域の知識・技能だけでなく、態度、倫理性、社会性などが含まれます。指導医と共にプロフェッショナルを目指して下さい。これに関連した具体的な目標や方法を以下に示します。

1) 医師としての責務を自律的に果たし、患者に信頼されるコミュニケーション能力
領域における専門的知識・技能を身につけ、診断能力を高めることはプロフェッショナルとして当然です。さらに疾患について説明できるだけでなく、相手の立場になって聞くことができ疑問に答えられなければ信頼を得ることは出来ません。分からないことは、誠意をもって調べて回答しましょう。形成外科領域では治療方法が手術となることが多く、その必要性、危険性、合併症とその対策、予後、術後の注意点などについての説明を指導医のもとで学習し、実践します。また、治療経過や結果についての的確に把握し、患者に説明する能力もひつようです。さらに、治療期間や治療費についても精通しておく必要があります。

2) 患者・社会との契約を理解し実践できる能力

健康保険制度を理解し、保険医療をメディカルスタッフと協調して実践します。そのためには、医療行為に関する法律を理解し遵守しなければなりません。それらに基づきすべての医療行為や患者に行った説明などを書面化し、管理しなければなりません。診断書・証明書などを作成や管理することも重要です。また、医薬品や医療用具による健康被害の発生防止の理解と適切な行動が求められます。これらのすべてにおいて守秘義務を果たし、プライバシーへの配慮ができなければなりません。原則として、家族に話す内容は事前に患者本人の同意を得ておくべきです。

3) 医療安全を理解し、チーム医療が実践できる能力

保存療法、手術療法、その他医療行為のすべてにおいて医療安全の重要性を理解し、事故防止や事故後の対応がマニュアルに沿って実践できることが求められます。専門研修プログラムでは、施設における医療安全に関する講習会や感染対策に関する講習会にそれぞれ最低1年に2回は出席することが義務づけられています。これらの講習会は、日本形成外科学会でも開催されており、積極的に参加し日常の診療にフィードバックすることが大切です。また、チーム医療が多いことは形成外科の大きな特徴であり、他の医療従事者と良好な関係を構築し協力して患者の診療にあたることが重要です。臨床の現場から疑問に思うことや今社会が医療に求めていることを自ら感知し、研究する姿勢が大切であり、その態度が後輩の模範となるよう努めます。チーム医療の一員として指導医のもとに患者を受け持ち、学生や後輩医師の教育、指導も積極的に行います。もちろん専攻医自身もチームの一員として様々なメンバーから指導を受けることができます。

4) 問題対応能力と提示できる能力

指導医は専攻医が、専門医として独り立ちできるよう努めますが、独り立ちとは通り一遍のことができるようになるということではありません。臨床上の疑問点を解決するための情報を自ら収集および評価し、患者への対応を実践します。EBMは、当然その基礎となります。専門研修プログラムでは、症例に関するカンファレンスが設定されていますが、これに積極的に参加し、呈示と討論ができるようにしてください。専攻医は受け持ち患者についての疑問を提示し、同僚や指導医から提示された疑問についてはEBMに沿って批判的吟味を行うことが重要です。また、臨床研究や治験の意義を理解し、参加する姿勢も大切です。

7. 施設群による専門研修プログラムおよび地域医療についての考え方

1) 施設群による研修

本研修プログラムでは山形大学医学部附属病院を基幹施設とし、連携施設とともに研修施

施設群を構成しています。施設群で育成することの意義は、各施設によって分野や症例数が異なるため、専攻医が専門研修カリキュラムに沿って十分に研修を行うことです。専攻医はこれらの施設群をローテートすることにより、多彩で偏りのない充実した研修を行うことが可能となります。このことは、専攻医が専門医取得に必要な経験を積むことに大変有効です。また、大学だけの研修ではまれな疾患や治療困難例が中心となり **Common Disease** の経験が不十分となります。この点においては、地域の連携病院では多彩な症例を多数経験することで医師としての基本的な力を獲得できる上で有利です。医師としての基礎となる課題探索能力や課題解決能力は一つ一つの症例について深く考え、症例報告や論文としてまとめることで身につけていきます。このような理由から、施設群で研修を行うことが非常に大切です。

施設群における研修の順序や期間等については、専攻医を中心に考え個々の形成外科専攻医の希望と研修進捗状況、各病院の状況、地域の医療体制を勘案して、山形大学形成外科研修プログラム管理委員会が決定します。

2) 地域医療の経験

臨床においては、診断名からだけではなく患者の社会的背景や希望も考慮に入れた上で治療方針を選択し、患者に医療を提供する必要があります。その点において地域の連携病院では、責任を持って多くの症例の診療にあたる機会を経験することができます。また、足病変など形成外科における慢性的な疾患の治療においては、地域医療との連携が不可欠となります。形成外科を中心とした地域医療に貢献するためには、総合的な治療マネジメント能力が要求されるため、臨床能力の向上を目的とした地域医療機関における外来診療や、地域で開催される勉強会や講演会に積極的に参加する必要があります。

8. 専門研修プログラムの施設群と専攻医受け入れ人数

1) 専門研修基幹施設

山形大学医学部附属病院（山形県山形市、631床）が専門研修基幹施設となります。（研修プログラム統括責任者：1名、責任者を含む指導医：2名、2024年症例数：531例）

自然豊かな広大な周辺地域に医学部キャンパスと隣接して病院が立地しています。大学病院として最先端の医療機器、設備が整っています。2021年からは東日本として初となる重粒子線治療が開始され、先進的医療を提供する施設として発展しています。形成外科外来ブースは3部屋、処置室が1部屋あり、局所麻酔手術を外来で行う設備も整っています。新しく使用許可を得た医局や医員室など若手医師の研修環境にも恵まれています。

2) 専門研修連携施設

山形大学形成外科研修プログラムの施設群を構成する連携病院は以下の通りです。

このうち日本海総合病院、公立置賜総合病院、獨協医科大学埼玉医療センターは地域医療研修施設も兼ねた形成外科研修を行うことが可能です。

・日本海総合病院（山形県酒田市、630床）：指導医1名、2024年症例数：631例

山形県北西部、日本海に面する立地に位置する日本海総合病院は庄内二次医療圏の要となる中核病院です。山形県北西部のみならず新潟や秋田からも患者が来院する環境にあります。幅広い形成外科疾患に対応しており、各種設備も整っています。

・公立置賜総合病院（山形県川西町、520床）：指導医1名、2024年症例数：518例

24時間対応の救命救急センターや最新の医療設備と技術を有する、山形県南部の置賜二次医療圏の中核となる病院です。小児形成外科や手外科をはじめ、数多くの症例を経験することができます。

・獨協医科大学埼玉医療センター（埼玉県越谷市、928床）：指導医2名、2024年症例数：582例

埼玉県東南部で約200万人の医療圏の中核となる急性期病院です。救命救急センターや22部屋をそなえた手術室など、高い医療活動が特徴の施設です。都市部の医療を反映した多くの経験を積むことができます。

・獨協医科大学病院（栃木県壬生町、1067床）：指導医3名、2024年症例数：1314例

獨協医科大学病院は北関東最大規模の特定機能病院としてドクターヘリも導入して臨床の最前線を担っています。熱傷、交通外傷などによる救急患者も多く、若手医師にとっては形成外科の救急医療拠点として、首都圏の大学病院とは違った総合的な形成外科治療を習得できる大学病院です。獨協医科大学形成外科自体が基幹施設として独立した研修プログラムを有していますが、双方の合意のもと、山形大学形成外科の連携研修施設としても登録がなされており、本プログラムで研修できる体制となっています。いままで全国各地の大学の教室から若手医師の派遣を受け入れ、形成外科専門医として必要な研修を行ってきた多くの実績もある大学病院です。小耳症・外耳道閉鎖に対する形態と機能の再建や、顔面神経麻痺に対する総合的形成外科治療、リンパ浮腫に対する手術療法を含めた集学的治療、再生医療を視野に入れた抗加齢外科を目指す美容外科治療など、形成外科の中でも専門性の高い分野について学ぶこともできます。

3) 専攻医受け入れ人数

山形大学形成外科グループ全体での年間症例数は1728例(按分率適用後の値/2024年分)です。専攻医1人当たり最低必要な症例数は年間75例(4年で300例)ですので、症例から考えた場合はグループ全体で5名までと十分な人数の専攻医の受け入れが可能です。

指導医の数は山形大学医学部附属病院：1.5名(按分)、日本海総合病院：1名、公立置賜

総合病院：1名、獨協医科大学埼玉医療センター：0.25名（按分）で、直接専攻医の指導にあたる指導医は3.5なので、指導医の数からみた年間受け入れ可能な専攻医数は3.5となります（全学年では14名）。この中には他のプログラム基幹施設である獨協医科大学病院の指導医は計算に入れておりません。

山形県各病院の専攻医の有給雇用枠は、山形大学医学部附属病院：11、日本海総合病院：3名、公立置賜総合病院2であり、合計16名の有給雇用枠が確保されています。専攻医期間が4年間であるため1年分で4名分の有給雇用枠ということになります。

症例数、指導医数、雇用枠数を総合すると、グループ全体での専攻医受け入れ数は1年間に最大3名ということになります。

9. 施設群における専門研修コースについて

形成外科領域専門研修カリキュラムでは、到達目標の達成時期や症例数を1年次から4年次まで項目別で設定しています。しかし実際には、各施設の症例数や人事異動などでその時期が前後すると予測されます。そのため、設定した年次はあくまで目安であり、4年次までにすべての到達目標を達成することを最終目標とした上で、基幹施設と連携施設で連携しながら専門研修コースを設定していく必要があります。

1) 各年次の目標

① 専門研修1年目

医療面接・記録：病歴聴取を正しく行い、診断名の想定・鑑別診断を述べることができる。

検査：診断を確定させるための検査を行うことができる。

治療：局所麻酔方法、外用療法、病変部の固定法、理学療法の処方を行うことができる。

基本的な外傷治療、創傷治療を習得する。

偶発症：考えられる偶発症の想定、生じた偶発症に対する緊急的処置を行うことができる。

② 専門研修2年目

専門研修1年目研修事項を確実にこなせることを前提に、形成外科の手術を中心とした基本的技能を身につけていく。研修期間中に 1) 外傷, 2) 先天異常, 3) 腫瘍, 4) 瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド, 5) 難治性潰瘍, 6) 炎症・変性疾患, 7) その他 について基本的な手術手技を習得する。

③ 専門研修3年目

マイクロサージャリー、手外科などより高度な技術を要する手術手技を習得する。また、学会発表・論文作成を行うための基本的知識を身につける。

④ 専門研修 4 年目以降

3 年目までの研修事項をより深く理解し、自分自身が主体となって治療を進めていけるようにする。さらに、再建外科医として他科医師と協力の上、治療する能力を身につける。また、言語、音声、運動能力などのリハビリテーションを他の医療従事者と協力の上、指示、実施する能力を習得する。

2) 4 年間で手術経験数および執刀数

基幹施設と連携施設を合わせた研修施設群全体について、専攻医 1 名あたり 4 年間で最低 300 例（内執刀数 80 例）の経験（執刀）症例数を必要とします（手術内容の内訳は 3 頁を参照）。

3) 専門研修ローテーション

基幹施設である山形大学医学部附属病院と 3 つの連携施設で、すべての形成外科専門医カリキュラムを達成することを目標にします。但し、それぞれの施設には取り扱う疾患の分野にばらつきがあるため、不足分を補うように施設間での異動を行っていきます。

なお、山形大学医学部附属病院、および獨協医科大学病院における研修期間中には、臨床だけでなく基礎実験の助手など基礎研究に携わることによって、早期からからリサーチマインドを育てていくことも目標としています。また、症例報告などの論文作成を行い、論文作成能力の向上を図っていきます。

【ローテーションの例】

専攻医	1年次	2年次	3年次	4年次
①	山形大学	置賜	日本海	獨協医大
②	日本海	山形大学	獨協医大	日本海
③	置賜	獨協医大	山形大学	置賜
④	獨協医大	日本海	置賜	山形大学

10. 専門研修の評価について

専門研修中の専攻医と指導医の相互評価は施設群による研修と共に専門研修プログラムの根幹となるものです。専門研修の 1 年目から 4 年目までのそれぞれに、基本的診療能力と形成外科専門医に求められる知識・技能の習得目標を設定し、その年度の終わりに達成度を評価します。このことにより、基本から応用へ、さらに専門医として独立して実践できるまで着実に実力をつけていけるように配慮しています。

一方、指導医は日本形成外科学会が主催する、あるいは日本形成外科学会の承認のもと

で主催される形成外科指導医講習会において、フィードバックの方法についての講習を受けます。指導医講習会の受講は、指導医認定や更新のために必須でもあります。

(要点)

- ・ 指導医は日々の臨床の中で専攻医を指導します。
- ・ 専攻医は経験症例数・研修目標達成度の自己評価を行います。
- ・ 指導医も専攻医の研修目標達成度の評価を行います。
- ・ 医師としての態度についての評価には、自己評価に加えて、指導医による評価、施設の指導責任者による評価、看護師長などの他職種による評価が含まれています。
- ・ 専攻医は毎年 9 月末（中間報告）と 3 月末（年次報告）に所定の用紙を用いて経験症例数報告書及び自己評価報告書を作成し、指導医はそれに評価・講評を加えます。「専攻医研修実績フォーマット」を用いて行います。
- ・ 指導責任者は「専攻医研修実績フォーマット」を印刷、署名・押印したものを専門研修プログラム管理委員会に提出します。「専攻医研修実績フォーマット」は、6 ヶ月に一度、専門研修プログラム委員会に提出します。自己評価と指導医評価、指導医コメントが書き込まれている必要があります。「専攻医研修実績フォーマット」の自己評価と指導医評価、指導医コメント欄は 6 ヶ月ごとに上書きしていきます。
- ・ 4 年間の総合的な修了判定は研修プログラム統括責任者が行います。この修了判定を得ることができてから専門医試験の申請を行うことができます。

1 1. 専門研修管理委員会について

専門研修基幹施設と各専門研修連携施設の各々において、形成外科領域指導医から選任されたプログラム責任者を置きます。専門研修基幹施設においては、各専門研修連携施設を含めたプログラム統括責任者を置きます。

専門研修基幹施設には、専門研修基幹施設と各専門研修連携施設のプログラム責任者より構成される専門研修プログラム管理委員会を置き、プログラム統括責任者がその委員会の責任者となります。専門研修基幹施設は、専門研修プログラム管理委員会を中心として専攻医と連携施設を統括し、専門研修プログラム全体の管理を行い専攻医の最終的な研修修了判定を行います。

専門研修プログラムには、各連携施設が研修のどの領域を主に担当するか（例えば形成外科一般、小児治療、癌治療、熱傷治療、美容など）を明示し、専門基幹施設が専門研修プログラム管理委員会を中心として、専攻医の連携施設での研修計画、研修環境の整備・管理を行います。

専門研修基幹施設と各専門研修連携施設において、領域指導医と施設責任者の協力により定期的に専攻医の評価を行い、また専攻医による領域指導医・指導体制に対する評価も

行います。これらの双方向の評価を専門研修プログラム管理委員会で検討し、プログラムの改善を行います。

1 2. 専攻医の処遇と就業環境について

研修施設責任者とプログラム統括責任者は、専攻医の適切な労働環境の整備に努め、また専攻医の心身の健康維持に配慮し、これに関する責務を負います。

基幹施設で研修する間、専攻医は原則として山形大学医学部附属病院の医員として採用します。その処遇を以下に示します。

- ・勤務体制と勤務時間：原則 7 時間 45 分，週 5 日
- ・給与：（年俸制）月額 276,000 円（他各種手当あり）
- ・宿舍：空きがある場合入居可能
- ・健康診断：年 1 回
- ・保険関係
 - (1) 全国健康保険協会管掌健康保険，厚生年金，雇用保険を適用します
 - (2) 労働者災害補償保険を適用します
 - (3) 医師賠償責任保険：病院での加入のほか任意保険への加入を積極的に勧めます

※上記給与のほか専攻医には週半日の学外業務日（兼業）が最大月 6 回認められ（申請し、許可を得た場合に限り）、これによる収入が加わります。

研修関連施設に関しても、専攻医の安全及び衛生並びに災害補償については、労働基準法や労働安全衛生法及び学校保健法に準じます。給与（当直業務給与や時間外業務給与を含めて）、福利厚生（健康保険、年金、住居補助、健康診断など）、労働災害補償などについては、各研修施設の処遇規定、就業規則に従いますが、これらが適切なものであるかにつき研修プログラム管理委員会がチェックを行います。育児休暇や介護休暇に関しては、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」に準じます。

当直あるいは時間外業務に対しては、各研修施設において専門医や指導医のバックアップ体制を整えます。専攻医の勤務時間は、1 ヶ月単位の変形労働時間を準用し、1 ヶ月を平均して 1 週間あたり 40 時間の範囲内において定めるものとしますが、専門研修を行う施設の実態に応じて変更できるものとします。

1 3. 専門研修プログラムの改善方法

山形大学形成外科研修プログラムでは専攻医からのフィードバックを重視して専門研修プログラムの改善を行うこととしています。

1) 専攻医による指導医および研修プログラムに対する評価

専攻医は、年次毎に指導医，研修施設，研修プログラムに対する評価を行います。また、指導医も研修施設や研修プログラムに対する評価を行います。専攻医や指導医等からの評価は、専門研修プログラム管理委員会に提出され研修プログラム管理委員会は、研修プログラムの改善に役立っています。このようなフィードバックによって、研修プログラムをより良いものに改善していきます。

専門研修プログラム管理委員会は必要と判断した場合、専攻医指導施設の実地調査および指導を行います。評価にもとづいて何をどのように改善したかを記録し、日本形成外科学会及び日本専門医機構に報告します。

2) 研修に対する監査（サイトビジット等）・調査への対応

項目 2 1.のとおり、専門研修プログラムに対して、学会または日本専門医機構からサイトビジット（現地調査）が行われます。その評価にもとづいて、専門研修プログラム管理委員会で研修プログラムの改良を行います。専門研修プログラム更新の際には、サイトビジットによる評価の結果と改良の方策について日本形成外科学会に報告します。

1 4. 修了判定について

専門研修 4 年終了時あるいはそれ以降に、研修プログラムに明記された達成到達基準を基に、研修期間が基準に満たしていることを確認します。また、知識，技能，態度それぞれについて評価を行い、知識，技能，態度に関わる目標の達成度を総括的に把握し、専門研修基幹施設の専門研修プログラム管理委員会において、総合的に終了判定の可否を決定します。知識，技能，態度のひとつでも欠落する場合は専門研修修了と認めません。そして、専門研修プログラム管理委員会の責任者であるプログラム統括責任者が、専門研修プログラム管理委員会における評価に基づいて、専攻医の最終的な専門研修修了判定を行います。

1 5. 専攻医が専門研修プログラムの修了に向けて行うべきこと

1) 修了判定のプロセス

専攻医は「専攻医研修実績フォーマット」と「評価シート」を専門医認定申請年の 4 月末までに専門研修プログラム管理委員会に送付します。専門研修プログラム管理委員会は 5 月末までに修了判定を行い、研修証明書を専攻医に送付します。専攻医は日本専門医機構の形成外科専門医委員会に専門医認定試験受験の申請を行います。

2) 他職種評価

専攻医は病棟の看護師長など少なくとも医師以外のメディカルスタッフ 1 名以上からの評

価も受ける必要があります。

16. Subspecialty 領域との連続性について

日本専門医機構形成外科専門医を取得した医師は、形成外科専攻医としての研修期間以後に Subspecialty 領域の専門医のいずれかを取得することが望まれます。現在 Subspecialty 領域の専門医には、日本形成外科学会認定の特定分野指導医である皮膚腫瘍外科分野指導医、小児形成外科分野指導医、再建・マイクロサージャリー分野指導医、レーザー分野指導医が、そして日本形成外科学会認定の分野指導医として日本創傷外科学会認定の創傷外科専門医、日本頭蓋顎顔面外科学会認定の頭蓋顎顔面外科専門医、日本熱傷学会認定の熱傷専門医、日本手外科学会認定の手外科専門医、日本美容外科学会（JSAPS）認定の美容外科専門医があります。

17. 形成外科研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム研修の条件

以下に要点をまとめます。

- ① 専門研修プログラム期間のうち、出産に伴う半年以内の休暇は 1 回までは研修期間にカウントできる。
- ② 疾病での休暇は 1 年まで研修期間をカウントできる。
- ③ 疾病の場合は診断書を、出産の場合は出産を証明するものの添付が必要である。
- ④ 留学および診療実績のない大学院の期間は研修期間にカウントできない。
- ⑤ 専門研修プログラムの移動は、認定施設認定委員会に申請の上、日本専門医機構の承認が必要であり、移動前・後のプログラム統括責任者と協議した上で決定する。
- ⑥ その他は、24 頁注記参照のこと。

18. 専門研修プログラム管理委員会

専門研修基幹施設に専門研修基幹施設と各専門研修連携施設のプログラム責任者より構成される専門研修プログラム管理委員会を置き、専門研修プログラムと専攻医を統括的に管理します。

1) 専門研修プログラム管理委員会の役割と権限

専門研修プログラム管理委員会は、専門研修基幹施設と各専門研修連携施設のプログラム責任者の緊密な連絡のもとに、専門研修プログラムの作成やプログラム施行上の問題点の検討や再評価を継続的に行います。また、各専攻医の統括的な管理（専攻医の採用や中断、専門研修基幹施設や専門研修連携施設での研修計画や研修進行の管理、学習機会の確保、研修環境の整備など）や評価を行います。更に、各専門研修連携施設において適切に専攻

医の研修が行われているかにつき各専門研修連携施設を評価して、問題点を検討し改善を指導します。

2) プログラム統括責任者

プログラム統括責任者は、専門研修プログラム管理委員会の責任者であり、専門研修プログラムの管理・遂行や専攻医の採用・終了判定につき最終責任を負います。またプログラム統括責任者は、専門研修プログラム管理委員会における評価に基づいて、専攻医の最終的な研修修了判定を行い、その資質を証明する書面を発行します。

3) 専門研修連携施設での委員会組織

専門研修連携施設においては、指導専門医と形成外科領域専門医より構成する専門研修プログラム管理委員会を置き、指導専門医から選任された専門研修プログラム連携施設担当者が委員会の責任者となります。専門研修連携施設での委員会の責任者である専門研修プログラム連携施設担当者は、専門研修基幹施設と各専門研修連携施設のプログラム責任者より構成される専門研修プログラム管理委員会の一員として、専門研修プログラム管理委員会における役割を遂行します。

19. 専門研修指導医

指導医の基準については、指導医は一定の基準を満たした専門医であり、専攻医を指導し評価を行います。

20. 専門研修実績記録システム、マニュアル等について

1) 研修実績の記録

研修実績および評価の記録については、「専攻医研修実績フォーマット」に研修実績を記載し、指導医による形成的評価、フィードバックを受けます。

「専攻医研修実績フォーマット」に研修実績を記録し、一定の経験を積むごとに専攻医自身が形成的評価を行い記録してください。少なくとも1年に1回は「専攻医研修実績フォーマット」を用いて、医師としての基本姿勢、診療態度・チーム医療、担当した入院患者の疾患・症例、経験すべき症状への対応、経験した手技について形成的自己評価を行ってください。研修を修了しようとする年度末には総括的評価により評価が行われます。

専攻医の研修履歴（研修施設、期間、担当した専門研修指導医）、研修実績、研修評価は山形大学形成外科で厳重に保管されます。さらに専攻医による専門研修施設および専門研修プログラムに対する評価も同様に保管されます。

2) 専門研修プログラム運用マニュアル

専門研修プログラムの運用にあたって、以下の専攻医研修マニュアルと指導者マニュアルを用います。

- ・ 専攻医研修マニュアル
- ・ 指導者マニュアル
- ・ 専攻医研修実績記録フォーマット
- ・ 指導医による指導とフィードバックの記録

専攻医自身が自分の達成度評価を行い、指導医も形成的評価を行って記録します。

少なくとも1年に1回は「専攻医研修実績フォーマット」を用いて、医師としての基本姿勢、診療態度・チーム医療、担当した入院患者の疾患・症例、経験すべき症状への対応、経験した手技について形成的評価を行い、評価者は「劣る」、「やや劣る」の評価を付けた項目については必ず改善のためのフィードバックを行い記録し、翌年度の研修に役立たせます。

2 1. 研修に対するサイトビジット（訪問調査）について

専門研修プログラムに対して、日本専門医機構からのサイトビジットがあります。サイトビジットにおいては、研修指導体制や研修内容について調査が行われます。その評価は、専門研修プログラム管理委員会に伝えられ、専門研修プログラムの必要な改良を行います。

2 2. 専攻医の採用と修了

1) 専攻医の採用方法

山形大学形成外科研修プログラム管理委員会は、毎年6月から説明会等を行い、形成外科専攻医を募集します。専門研修プログラムへの応募者は、10月31日までに専門研修プログラム責任者宛に所定の形式の「山形大学形成外科専門研修プログラム応募申請書」と履歴書を提出してください。申請書は、①電話で問い合わせ（023-628-5413：山形大学医学部歯科口腔・形成外科学講座）、あるいは②e-mailで問い合わせ（prs@mws1.id.yamagata-u.ac.jp）のいずれかの方法で入手してください。そのうえで、日本形成外科学会のホームページ（<https://jsprs.or.jp/specialist/shutoku/index.html>）から専攻医の申請登録をしてください。原則として10月中に書類選考および面接を行い、採否を決定して本人に文書で通知します。応募者および選考結果については11月の山形大学形成外科研修プログラム管理委員会において報告します。

2) 研修開始届け

研修を開始した専攻医は、「山形大学形成外科専門研修開始届」を山形大学形成外科専門研

修プログラム管理委員会に提出します。同プログラム管理委員会からこの書式を日本形成外科学会に提出し、機構への登録を行います。

3) 研修修了要件

17 頁の修了判定プロセスおよび下記注記を参照のこと。

注記

研修の条件

1. 研修期間

形成外科専門研修は 4 年以上とする。但し義務化された臨床研修期間中の形成外科研修は含まない。この規定は第 98 回日本国医師国家試験合格者以降の者に適用する。それに該当しない者については、これと同等以上の形成外科研修を終了したと専門医認定委員会が認定したものは可とする。ただし、大学院生、時短勤務者や非常勤医などの研修期間に関しては、週 32 時間（ただし 1 日 8 時間以内）以上形成外科の臨床研修に携わったものはフルカウントできる。なお、臨床研修が週 32 時間に満たなくとも、機構の形成外科領域研修委員会が認めた場合には、勤務時間に応じて分数でのカウントもあり得る。研修の実状は当該科の所属長、または施設長が責任をもって認定する。なお、申請内容に疑義が生じた場合、専門委員会で審議することがある。